

## 1 学校教育目標

○考える子 ○がんばる子 ○助け合う子 ○元気な子

## 2 めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	○児童・保護者・地域から信頼される学校 ○子供一人一人を大切にし、子供たちが「明るく生き生きと活力のあふれる」学校 ○子供・教職員ともに良さや可能性を十分発揮し、ともに成長する学校
○児童・生徒像	○子供たちがめざして欲しい「扇っ子」の姿 ・「おもいやり」の心を大切にする児童、「うんどう」して体を鍛える児童、「ぎもん」を大切にし、自ら学ぶ児童
○教師像	○自らの向上を図ることができる教師 ○学校運営に貢献し、主体的な提案ができる教師 ○学校、児童、地域に誇りをもてる教師

## 3 学校の現状及び前年度の成果と課題

【学力向上】補習や計算名人検定の実施により、基礎的な計算力は定着しつつある。しかし、学んだことを活用する力、応用力には課題がある。また、言われたことはできるが、自分で考えて行動できる児童は少なく、主体的に学びに向かう態度についても課題が多い。教員の指導方法のさらなる改善が必要である。さらに、家庭学習の習慣が身に付いている児童が少なく、家庭と連携して学力向上に取り組む必要がある。

【自己肯定感の醸成】日々の指導の中で「児童を認める声かけ」をすることを全校で意識して取り組んでいる。また、学級の係活動など責任をもって取り組む活動を設定することで自己有用感を高めている。しかし、コロナ禍で発表の場や異学年交流の場の設定が難しかったため、自信をもって自分を表現する力の育成には課題が残った。児童の活躍の場を工夫しながら、児童が自信をもてるようにし、自己肯定感の醸成を図っていきたい。

【教員の授業力向上】校内研究や研修を工夫しながら実施した。授業力向上に対する教員の意識は高まってきている。しかし、具体的にどうしたらよいかわからない教員もいるため、研究推進委員会を中心に授業改善に組織的に取り組んでいきたい。また、小中連携を充実させることで、校内の教員の授業力向上につなげていきたい。

## 4 重点的な取組事項

	内 容	実施期間（年度） R:令和				
		R2	R3	R4	R5	R6
1	学力向上アクションプラン	○	○	○	○	○
2	自己肯定感の醸成	○	○	○	○	○
3	教員の授業力向上	○	○	○	○	○

## 5 令和4年度の重点目標

重点的な取組事項－1		学力向上アクションプラン							
A 今年度の成果目標		達成基準 (目標通過率)		実施結果 (通過率結果)		コメント・課題		達成度 ◎○△●	
児童の基礎学力の定着 活用力の育成		学力調査通過率 80%以上		学力調査通過率 79.1% (国語 75.7% 算数 82.6%)		目標である 80%以上には届かなかったが、算数に関しては 82.6%と成果が出てきている。		○	
B 目標実現に向けた取組み									
新・継	アクションプラン	対象・実施教科	頻度・実施時期	具体的な取り組み内容 (誰が、何を、どのように)	達成確認方法	達成目標 (=数値) (いつ・何を・どの程度)	実施結果	コメント・課題	達成度 ◎○△●
継続	朝学習 パワーアップ タイム	全学年 国語 算数 読書	火:国語 水:読書 金:算数 始業前	【指導者】担任 【ねらい】復習・確認 【使用教材】計算プリント等	単元テストや タブレットを 活用し、記録 していく。	・単元テストで 正答率 80% 以上	・単元テストでは、概 ね正答率 80%を超え ているが、4,5年につ いては 70%代である。	80%を超えている学 年も単元によっては 正答率が下がる。学ん だことが定着するよ う授業改善を進める と共に、課題のある単 元については補習を 計画的に行っていく。	△
継続	補習教室 (A補習) (C補習)	全学年・ 各教科	休み時 間や放 課後等	【指導者】各担任・専科 【ねらい】指導中内容の定着 【使用教材】プリント等	定着度 確認テスト 12・2月実施	2月テストで目 標値を通過する 対象児童 80%	目標値の通過率は 80%代であるが学級 の差がある。	学級差が出ないよう に学校全体で補習の 内容を充実させる。	△
継続	放課後補習 教室 (B補習)	全学年 国語、 算数	放課後	【指導者】各学年担当者 (担任・専科・管理職等) 【ねらい】つまずき解消 【使用教材】 ・定着度テスト対応問題 等	定着度 確認テスト 9月に実施	2月までに実施 する定着度確認 テストで目標値 を通過する対象 児童 80%	・定着度テストでは 正答率 80%をこえ た。	各児童のつまずきに 応じた指導ができ成 果をあげることがで きた。	○
継続	計算名人 検定	2年生～	2年かけ 算学習後 ～ 3年～ 通年	【指導者】担・専・支援員 【ねらい】 計算力の定着 【使用教材】 計算問題プリント	定着度確認テ スト (対象児童)	全学年 定着率 90%以 上	計算名人の取組み では、ほぼ 100%の児 童が全問正解で合格 している。	取組中は成果が出る が、時間が経つと定着 率が下がる。タブレッ トを活用しながら定 着を図っていきたい。	○

継続	読書・読み聞かせ活動	全学年	年間	【指導者】担・ボランティア等 【ねらい】 読書習慣の定着・語彙の獲得・知的好奇心の涵養 【使用教材】記録用カード	記録用カード 題名とページ 数を記録	・1～3年 80冊/年 ・4～6年 6000頁/年 50%以上が達成	50%以上の児童が目 標達成できた学級は 約半数程度である。	1人あたりの図書室 利用率は区内で1番 である。各児童の読 書量も増えてきた。 来年度はさらに児童 の意欲を高めていき たい。	○
継続	ICT教育の 充実	全学年	通年	全学年で年間通してICTを 活用した授業を実施。 年間計画に沿って各担任に よるプログラミング教育を 行う。 タブレットを活用した授業 実践についての研修会を行 い、授業に活用していく。	年間指導計画 の作成。 AIドリルの活 用。 研究授業の実 施。	長期休みには タブレット全 員持ち帰り習 熟を図る。 高学年では、 90%以上の児 童がスムーズ にタイピング ができるよう にする。	長期休みでは、全員 持ち帰りを実施し た。授業でも、タブ レットを積極的に活 用することができ た。AIドリルについ ても、目標とする活 用率をクリアするこ とができた。	今後も、授業での活 用を工夫し、学力定 着につながるよう していきたい。	◎
継続	家庭学習の 手引き発行	全学年 全員	年1回 (4月)	【ねらい】 ・家庭学習の習慣化・協力 ・宿題の提出率を担当が確認	宿題提出状況 調査	宿題提出率 100%	宿題提出率は、90% を超えている。宿題 以外の家庭学習につ いては、課題が多い。	家庭学習の進め方な どについて具体的に 発信し、家庭の協力 を得られるようにし ていく。	○
継続	サマー スクール	全学年 算数 国語  各学年10 名程度 正答率 70%以下	夏休み 10日	【指導者】担・専・管 【ねらい】 担任による少人数指導。つま ずきの解消。解けなかった問 題の直し等。 【使用教材】 ・プリント教材 ・次へのステップ等	校内学力テス ト	次回の校内学力 テストで正答率 アップ	校内学力テストで は、対象児童のほと んどが正答率が上が り成果を得た。	日々の学習意欲につ ながるよう今後も工 夫改善していく。	○
新規	扇寺子屋	全学年	通年	放課後キッズぱれっとの時 間を活用し、自力で宿題に取 り組むことが難しい児童対 象に宿題の指導を管理職が 行う。	宿題提出状況 調査	宿題提出率 100%	今年度も感染防止の 観点から実施できな かった。		

継続	MIMによる指導の充実	1年 そだち指導	年間 国語・ そだち 補充	【指導者】1年担任、 そだち指導員 【ねらい】MIMの確実な定着 【使用教材】プリント教材	MIM 実施状況を毎月確認	1月に1stステージを85%	1月に1stステージ85%達成することができた。	来年度も個に応じたていねいな指導を行っていく。	◎
新規	音読指導の充実	全学年	通年	【指導者】担任 【ねらい】基礎学力の定着 【使用教材】教科書	国語だけでなく各教科、教科書の音読を授業観察	2月までに実施する定着度確認テストで目標値を通過する対象児童80%	国語の通過率80%代だった。	初発の文章の読解力には課題があり、引き続き音読指導を継続していく。	△

重点的な取組事項－2		自己肯定感の醸成			
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
自分も他人も大切にできる児童の育成		児童の意識調査の「自分には良いところがあると思う」の項目80%以上	「自分には良いところがあると思う」に関しては、ほとんどの学年が70%代という結果であった。特に自分の考えを表現することに苦手意識が強い児童が多く見られる。	日頃より「認める」指導を全教員で心がけているが、児童の自信に結びついていない。引き続き「認める」指導をしていくと共に、児童が自信を持てるような体験活動を取り入れていきたい。	△
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
基本的な生活習慣の定着	「早寝・早起き・朝ごはん」の達成率90%以上 あいさつ名人 90%以上	学校便りや保健便りなどで基本的な生活習慣の大切さを各家庭に向けて発信していく。 「生活がんばりカード」を活用して家庭と連携しながら児童の意欲を高めていく。 「あいさつ」週間を通してあいさつのできる児童の育成を目指す。	「朝ごはんを食べる」項目が90%を下回る学年がある。「早寝」については、ほとんどの学年が達成率60%程度である。 「あいさつ」に関しては、80%程度の児童ができるようになってきている。	「朝ごはんを食べる」項目の達成率が高いと学力も高くなる傾向が見られる。保護者に向けて啓発していきたい。「あいさつ」に関しては全教員で取り組んでいる成果が出てきている。	△

人権教育の充実	年間計画に沿った「特別の教科道徳」の授業の実施。 教員の人権研修を年3回以上実施	「特別の教科道徳」の授業で「生命尊重」「思いやり」「他者理解」について指導を深めていく。 研修を通して教員の人権意識の向上を図る。 全校で場に応じた丁寧な言葉使いができるよう取り組む。	道徳授業地区公開講座では「思いやり」をテーマに各学年授業を実施した。また、偶数学年では、人権擁護委員による授業も実施した。 教員の研修会を実施すると共に、職員会議や終礼の際にも、管理職から人権に関する話をした。	「思いやり」について児童は少しずつ理解しているが、校内の言語環境には課題が残る。 教職員含めて、日々丁寧な言葉使いができるよう引き続き指導をしていく。	○
特別活動の工夫	児童が主体的に活動に取り組み、全児童が学級に必要とされているという自己有用感をもてるようにする。	学級での係活動の充実 委員会活動の工夫 兄弟学年活動の実施 学級やクラブ・委員会での話し合い活動の充実 発表の場を多く設定	今年度は兄弟学年を実施することができ、委員会の発表の場も多くなってきた。	兄弟学年の取り組みによって、小さい学年に対する「思いやりの心」が育まれてきた。来年度も重点を置いていきたい。	○
様々な体験学習の実施	地域と連携した体験活動を年3回以上実施。 外部講師による出前授業を年3回以上実施。	地域の自然材を活用したり、地域の方をゲストティーチャーとしてお招きしたりしながら、地域と交流を図り、地域の一員であるという意識を高めていく。 外部講師を招いたり、出前授業を実施したりすることで、体験活動を充実させる。	地域での体験活動を年3回実施することができ、地域の方達との交流を通して、地域の一員であるという意識をもたせることができた。 東京都の「子供を笑顔にするプロジェクト」でオリンピックを招いて話を聞くことができ、児童にとって将来の夢をもつよききっかけとなった。	地域の方や外部の方から学ぶ機会は、児童にとって有意義である。 引き続き、来年度も工夫していきたい。	○

<b>重点的な取組事項－3</b>		授業力向上			
<b>A 今年度の成果目標</b>	<b>達成基準</b>	<b>実施結果</b>	<b>コメント・課題</b>	<b>達成度</b>	
全児童が「できた。」「わかった。」と実感できる授業の実践。	全教員による問題解決型授業の実施。 児童の「授業アンケート」の「勉強したことがわかる」の項目 90%以上	「勉強したことがわかる」の項目に関しては、「あてはまる」児童は80%以上「少しあてはまる」児童も含めると90%以上達成できた。	「勉強したことがわかる」に関しては100%目指して今後も授業改善に取り組む。	○	
<b>B 目標実現に向けた取組み</b>					
<b>項目</b>	<b>達成基準</b>	<b>具体的な方策</b>	<b>実施結果</b>	<b>コメント・課題</b>	<b>達成度</b>

授業観察による授業改善	管理職による授業観察を年3回以上実施し、授業改善を図る。	授業チェックシートを活用しながら、自己評価をした上で管理職による指導を行い改善を図る。	年3回の授業観察以外にも、校内を周りながら授業を観察し、改善が必要な時はすぐに指導した。また、効果的な取り組みに関しては校内で共有できるようにした。	「できた」「わかった」授業への意識は高まっている。引き続き指導をしていく。	△
校内研究の充実	年3回以上の授業研究の実施 年5回以上の研修会の実施	各分科会でテーマを決め、お互いに授業を見合い、授業研究を実施する。 各教科の指導の工夫など、研修会をもち、お互いに発表し合い授業に活用していく。	校内研修を通して、各自が課題改善に向けて取り組むことができた。 校内全体の研究授業をもつことは難しかったが、若手教指がベテランの授業を見に行くなど自主的に授業研究をする意識が高まった。	お互い授業を見合っ て学ぶという善い雰囲気 ができあがってきている。 来年度も切磋琢磨 できる集団を目指して いきたい。	○
小中連携の充実	年4回の研究授業と4回の研修会の実施	9年間の見通しをもって、系統的な指導計画を立てる。 他校の指導方法から自らの指導を振り返り、改善につなげていく。	小中連携の研究授業を通して、授業研究を深めることができた。また、研修会を通して、中学進学後を見据えた指導を意識することができた。	小中連携では、中学校の教師の専門性から学ぶことが多い。今後も内容を工夫しながら研究を深めていきたい。	○
教科指導専門員との連携	毎月1回以上教科指導専門員と管理職で情報交換を行い、若手教員の授業力向上に努める。	教科指導専門員の指導記録と若手教員の週案などから、課題を確認し、授業の改善に必要な指導をしていく。	毎月細かく管理職と情報共有することで指導の成果をあげている。	来年度も連携を密にして若手育成に努めていく。	○

## 6 まとめ

### (1) 今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

学力向上に関しては、ここ数年の取り組みの成果が出てきている。しかし、読解力や既習事項の活用力に関しては課題があり、引き続き授業改善と補習の充実に向けていく。自己肯定感の醸成に関しては、来年度は児童の活躍できる場を多く設定し、物事をやりきる達成感から自信をつけさせていきたい。合わせて、言語環境を整えることで人権意識を高めていきたい。授業力向上に関しては、児童の「勉強したことがわかる」の項目の達成率に比べて学力にその成果が出てきていないため、さらに工夫改善に取り組む必要がある。「できた」「わかった」を大切にしながら、学んだことを定着できるようにタブレットを活用しながら授業改善に取り組んでいきたい。授業力向上に対して、教員の意識は高まっているので、若手の自主研究や校内研究を充実させることでさらなる向上を目指していく。

## (2) 保護者や地域へのメッセージ

日頃より教育活動にご理解・ご協力いただき感謝しています。特に、行事や校外学習でのお手伝いなど協力いただけることで子供たちが安心して学習に取り組むことができている。日々の宿題へのご協力のおかげで、子供たちの基礎学力が確かなものとなってきています。「おすすめ本の紹介」など読書活動への参加も子供たちの興味を引き出すものになっていきます。来年度に向けて、学校としては「朝ごはんを食べる」の項目を100%の達成率に、「早寝」の習慣も80%以上の達成を目指していきたくと考えています。引き続きご協力いただきますようお願いいたします。

地域の方々には、子供たちの体験学習へのご協力に感謝申し上げます。また、日々の見守りのおかげで安心・安全に登下校ができています。引き続き扇小学校の子供たちを見守っていただければと思います。

## (3) その他（学校教育活動全般について）

今年度も新型コロナウイルスの感染防止に努めながら、教育活動をすすめる1年となった。しかし、昨年度に比べて工夫しながらできる行事も増えてきている。来年度も感染防止に努めながら、さらに体験学習の場を広げていきたい。